—ノ ー ト—

英 語 覚 え 書 き (2)

堀 内 俊 和

Something New or Strange in English (2)

Toshikazu HORIUCHI

これは，日常の教育研究活動を通して気づいたこと，問題となったことがらを，メモ風に書きとめていこうとする試みである．なお，この試みは，さらに進んだ研究等のきっかけとなったり，諸賢のご助言等をいただけたりすればよいが，というささやかな願いがこめられているものである．

7. measure の発音のこと（その2）

本紀要No.8 (1973)，p.215 でふれた measureの発音に関連して，アメリカのいくつかの大学で3年間 speech と drama の研究をして帰国した友人から若干の情報が届いた．かれが speech 学科の主任教授の手伝いで Indiana州南部の発音の誤りを調査した際，母音の後に〔ʃ〕，〔ʒ〕音が来るときは「その前の母音が二重母音化されたり口腔の前の方で発音される」傾向があり，この傾向は General American においても同様で，同教授によればそれらの発音はすべて誤りとみなされるとのことである．そして友人はつぎのような例をあげている．

pleasure: 〔plɛ́ʒɚ〕 → 〔pléɪʒɚ〕
pressure: 〔plɛ́ʃɚ〕 → 〔préɪʃɚ〕
bashful: 〔bǽʃfəl〕 → 〔béɪʃfəl〕
casually: 〔kǽʒʊəlɪ〕 → 〔kéɪʒʊəlɪ〕
fish: 〔fɪʃ〕 → 〔fiʃ〕
vision: 〔vízən〕 → 〔víʒən〕

ところで，上例からわかるように，母音変化が起っているのはすべて〔ʃ〕，〔ʒ〕の直前の強勢をうけた前舌母音であり，基本母音図からすれば〔æ〕 → 〔ɛ〕→〔e〕→〔ɪ〕→〔i〕と調音時の舌の最高点がしだいに硬口蓋に近づき，〔ʃ〕，〔ʒ〕も「硬口蓋歯茎音」と呼ばれるとおり舌の位置等が〔ɪ〕，〔i〕に類似していると考えられる．したがって，〔æ〕，〔ɛ〕，〔e〕の調音から〔ʃ〕，〔ʒ〕の調音に移行するとき途中で〔ɪ〕音がはいりこみやすい状況にあるのだから，それらの母音が二重母音化したり，〔ɪ〕が〔i〕になったりしやすいのは，自然のなりゆきであろう．この意味において，現在これらの発音がたとえ「誤り」だと言われようとも，ゆくゆく近い将来においては，大多数の人々の発音がこの方向にむかって変化をとげるのではないかと考えられるが，どうであろうか．

8. *an historian* 等の問題点

現在もっとも活躍しているアメリカの作家のひとりである James A. Michener が1970年に発表したベストセラー *The Quality of Life* の "Introduction"の最初のページに，

I have written a good deal of history, but I am not *an historian*.(イタリックは筆者)

という文がある．20世紀もあと4半世紀を残すだけとなった今日においても，"an historian" というようないわばあまりにも「伝統的」な表現が残存しているのかと，一種の驚きを覚えた．

さて，豊富な資料にもとづいて Quirk らによって編集された最近の文法書 *A Grammar of Contemporary English* (1972), p. 136 にはつぎのような記述がある（同書4.13の note (i)）．

There is divided usage before some words that are written with initial *h*, depending on whether *h* is pronounced or not:

a(n) {hotel / historical novel}

これだけのことならば何も問題はないわけであるが，ことはそんなに単純ではなさそうである．すなわち，この原則にたって historian などの前に an を認めるなら，〔h-〕音の落ちた発音をも記載してしかるべきなのに，最近出版された辞書の中には（〔outé l〕を載せて

いるのは2，3あるが）〔istɔ́:riən〕等を記載しているものはひとつもないのに，例示等によって an を認める辞書がかなりある，ということである．そして，これらの辞書は，およそつぎの3グループに分類できるようである．

A: hotel だけに〔h-〕の落ちた〔outél〕を記載し，historian 等には例示によってのみ an の可能性を示唆するもの．例．『新英和中辞典』（研究社，1972年3訂版）など．

B: 例示等によってのみ an の可能性を示唆しているもの．例．Kenkyūsha's *New Collegiate Dic.* (1972)，*Webster*[3] など．

C: an を全然認めていないもの．例．*AHD*(1969)，*RHD* (1969)，Webster's *New World Dic.* 2nd College Edition (1972) など．

では，辞書によってこのようにそのとりあつかいがまちまちなのはどうしてであろうか．

この点に関して特に興味あるのは，Fowlerの*Modern English Usage* である．というのは，その初版(1926)においては a/an の項で，

> *an* was formerly usual before an unaccented syllable beginning with h (*an historical work*)，but now that the h in such words is pronounced the distinction has become pedantic, & *a historical* should be said & written; similarly *an humble* is now meaningless & undesirable.

と言い切っているのに，Ernest Gowers によって改訂された第2版 (1965) においてはつぎのようになっているからである．

> *an* was formerly usual before an unaccented syllable beginning with h and is still often seen and heard (*an historian, an hotel, an hysterical scene, an hereditary title, an habitual offender*). But now that the h in such words is pronounced the distinction has become anomalous and will no doubt disappear in time. Meantime speakers who like to say *an* should not try to have it both ways by aspirating the h.（下線は筆者）

かくして，あれだけ偉大な影響力をもっていた Fowler の主張も半世紀ほどの間には徹底しなかったし，Gowers の予言も現在までのところ完全に実現してはいないようである．

こんなわけで，歴史的にどうであれ，また将来どうなろうとも，現に an historian 等の表現が行なわれているかぎり，上記のAグループにおける辞書の hotel のとりあつかいのように，〔h-〕音の落ちた発音をも記載したほうが，辞書のとりあつかいとしては合理的ではないであろうか．

9. Chugiro vs. Chujiro

Reader's Digest (Jan., 1974). p.123 でつぎの一文に出会いハッとした．

> Former Mayor Chugiro Haraguchi——a remarkable 84-year-old civil engineer——saw what needed to be done.

というのも，「チュージロー」なら日本人にごく普通の名前のようだが，「チューギロー」となると珍らしい感じがしたからである．コンテクストから前神戸市長だと分ったので，さっそく神戸市役所に問い合わせてみた．はたせるかな，それは原口忠次郎氏のことであった．

たしかに，英語の "g" は〔g〕と〔dʒ〕の両音を表わし得る．ちなみに，語頭の "g" が〔i〕音を表わす "i" と結合する単語を手もとの小辞典で調べてみたら，〔g〕と〔dʒ〕の割合はほぼ半々で，gibbous のように〔g〕とも〔dʒ〕とも発音される語も見つかった．また，語中での "g"＋〔i〕結合における "g"の音がどのような割合で起るかはそれほど簡単には調べられないが，やはり〔g〕，〔dʒ〕ともに起り得ることは確かである．

しかし，我々日本人にとっては，〔dʒ〕の表音文字としては，ヘボン式ローマ字表記に用いられる "j" のほうが，まぎらわしくなくてより適しているように思われるのだが，英米人のあいだでは，〔dʒ〕の表音文字として "g" を用いることが普通なのであろうか．

10. theirs who……のこと

真砂書房発行のテキスト J. Bronowski 著 *Science and Human Values*, p. 90につぎのような一節がある．

> Science has nothing to be ashamed of even in the ruins of Nagasaki. The shame is *theirs who appeal* to other values than the human imaginative values which science has evolved. The shame is ours if we do not make science part of our world, intellectually as much as physically, so that we may at last hold these halves of the world together by the same values.
> （イタリックは筆者）

ここにおける "theirs who appeal" という表現は，論理的にはひじょうに奇妙なものである．"theirs" が指示する先行詞は具体的には存在しないし，"theirs" が

"who" の先行詞になっているというのが特に奇異な感じを与える．しかし，一読してほとんど抵抗なしに理解できるからふしぎである．おそらくは，that of those who appeal というような構造を，われわれが直観的に理解するのであろう．さらに，ここの "theirs" は，後出の "The shame is ours" との対比においても，効果をあげていると思われる．

ところで，荒木一雄著『英文法 —— 理論と実践』(1966，研究社）のpp. 85-6によると，「古くは，関係代名詞が所有格の語を先行詞にとることも自由であった」が，「現代標準英語で必ずしも廃用というわけではないようである」ということで，Maugham からのつぎの実例があげられている．

(1) How fortunate is his lot who can accept the charming emotions that Nature gives him without trying to analyse the charm! ——*A Writer's Notebook*

さらに，所有格の後に名詞をとらない，いわば独立用法においては，〈所有格＋関代〉という結びつきは(1)の場合よりは高いひん度で現われるらしいということで，同作家からのつぎの実例があげられている．

(2) The best pattern of all is the husband man's who ploughs his land and reaps his crops, who enjoys his toil and enjoys his leisure, loves, marries, begets children and dies.——*The Summing Up*

ここで問題にした〈theirs who……〉というのは，上例(2)の一変形と考えられるが，(1)に関しても，"What a fortunate lot is his who……" と書きかえたとすれば，〈theirs who……〉と全く同一の型式となり興味深い．

11. 譲歩節を導く no matter について

いわゆる譲歩構文としての〈no matter＋疑問詞〉という表現は，わが国の辞書文法書等にも普通にとりあげられているが，つぎにあげるような〈no matter ＋ whether／if〉という表現は，最近よく見かけるようになったと思われるがほとんど言及されていない（今のところ筆者が気づいているのは，Kenkyusha's *New Collegiate Dic.* の whether の意味説明における "no matter if…or" という記述と，三省堂の『ホルト英和辞典』のwhetherの説明中での（no matter if…）という注記だけである．）

(1) Thus a contour like the falling, on this assumption, remains the same *no matter whether* it covers a single syllable *or* is stretched out to cover several.—— D. Bolinger (ed): *Intonation* (Penguin Books), p. 206

(2) I would keep my eyes open *no matter if* it lasted till midnight.——H. Miller: *Nexus* (An Evergreen Black Cat Book), p. 87

(3) *No matter if* your hair is three inches *or* three feet long, men like to touch it and run their fingers through it.——"J": *The Way to Become the Sensuous Woman* (Dell Book), p. 27

（引用文中のイタリックはすべて筆者）

さて，(1)の場合は，no matter がなくても whether……or……だけで譲歩の意味を表わしうるし，(2)の場合も，no matter がなくても，if＝even if の意味だとして従来よく説明されているように理解可能であろう．では，なぜ no matter が用いられるのであろうか．前者は＜no matter ＋ wh-＞の連想から whether の前に no matter がついたとも考えられるが，逆に，no matter 本来の意味から，譲歩の意味の明確化あるいは強調のために，whether, if に対しても用いられだしたと考えるほうがより適切ではないであろうか．

すなわち，*O. E. D.* がいうように "No matter" は "It makes no matter" あるいは "It is (of) no matter" を起源とするのだから，no matter 節が独立していると考えてもいいわけであるが，意味上の強い結びつきからそれが従節化してきたと考えるのである．このことは，Quirk らの *A Grammar of Contemporary English*, p. 751 のつぎの記述からもうなづけるであろう．

(4) The longer constructions *no matter wh-* and *it doesn't matter wh-* may be added to the list of universal conditional-concessive clauses introducers:

{No matter / It doesn't matter} how hard I try, I can never catch up with him.

ここでは，"It doesn't matter" に導かれる節が従節化していることを明示しているのである．

さらにまた，この考え方は，『英語青年』9月号（1974年）の "EIGO CLUB" 欄で森昌一氏が指摘された＜no matter＋that－*clause*＞の可能性の説明にもなると思われるので，同氏の引用文をここに転載させていただく．

(5) Photographers, less fortunate, have spent freezing hours outside the Federal Court in New York to get the day's picture of

Clifford Irving, *no matter that* it will be hard to distinguish it from yesterday's picture.——*Asahi Evening News*, March 10, 1972 (From *The Times*, London)

12. One of another

One another という句は「お互いに」というような意味でわが国の辞書によくのっているが，表記の表現はほとんど問題にされていない．これは構造上 of を必要とする構文において副詞的に用いられて，one another と同じような意味を表わしているようである．つぎの 2 例を見出したので書きとめておく．

(1) Yet I do not distinguish it〔the activity of science〕 from other imaginative activities; they are as much parts *one of another* as are the Renaissance and the Scientific Revolution.——Bronowski: *Science and Human Values* (真砂書房) p. 88

(2) Nevertheless, intonation must be kept distinct from these latter speech characteristics, since in many respects they are independent *one of another*. —— Bolinger (ed.): *Intonation* (Penguin Books), p. 68

(例文中のイタリックは筆者)

この場合，one of another でなくて of one another とすることも可能なように思われるが，実際はどうであろうか．また，of 以外の前置詞を含めて，one another が前置詞によって分離されるのとされないのとではどちらがより普通なのであろうか．

13. ～-teethed vs. ～-toothed

Reader's Digest を資料にして，ハイフンで結ばれた表現の調査をしているとき，

(1) saber-toothed ice
(2) crag-toothed ridges
(3) needle-teethed fish

という表現を収集した．いずれも意味はおのずと明白であるが，ここで問題にしたいのはそれぞれの形成過程である．

(1)は，"saber tooth" という名詞句をハイフンで結び接尾辞 -ed をつけた，英語によく見られる造語型式と考えてよかろう．(2)も同様に考えてよいと思われるが，tooth=provide or furnish with teeth と考えて，redundant ではあるが "snow-clad," "sunburnt" などと同様に toothed with crag と解釈されないこともないような気がしてくる．Quirk らの *A Grammar of Contemporary English* によると，前者と後者の造語型式は明確に区別されるべきだということだが，いずれとも断定できない場合がありうるのではないか，と思われる．

つぎの問題は，(3)の "needle-teethed" である．上述前者の造語法は，"five-colored ware," "an old six-wheeled truck" などのように名詞の単数形に -ed がつくのが普通であって，今回の調査においても複数形に -ed がついたものは，(3)を別にすればひとつも見あたらなかった．そこで，(3)は上述後者の造語型式かと思って辞書にあたってみると，teeth(e) がさきのtooth (vt.) の意味をもつとしているのは *Webrter*[3] だけで，しかも<Chiefly Scot>というただし書きがついていた．こんなわけで，(3)はやはり "needle teeth" という名詞句をハイフンで結び -ed をつけたものと考えたほうがよさそうである．この造語型式は異例なものではあるが，"needle-toothed" ではそのような歯が1本しかないような印象を与えるかもしれないのに反して，"needle-teethed" ではそれが何本もある感じを表現し得て妙である．

さらに，"needle-teethed" が生まれて来た背景には，(a) tooth が不規則変化の複数形 teeth をもち，-wheelsed* とか -colorsed* とかいうような奇異な形を生じないこと，および (b) tooth が派生語をつくるときに，単数形ばかりでなく複数形をもそのベースにすることがある，ということがあるように思われる．ちなみに，(b) に関して辞書で調べたところを，同種の複数形をもつ foot とともにここに付記しておく．

	Webster[3]	*RHD*	*AHD*		*Webster*[3]	*RHD*	*AHD*
toothed	○	○	○	footed	○	○	○
*teethed	×	×	×	*feeted	×	×	×
toothy	○	○	○	footage	○	○	○
teethy	○	×	×	feetage	○	×	×
toothless	○	○	○	footless	○	○	○
teethless	○	○	×	feetless	×	○	×
toothlike	○	○	×	footlike	○	×	×
*teethlike	×	×	×	*feetlike	×	×	×

注 ○印は辞書に記載されているもの